



創世ホール名画鑑賞会 vol. 32 『新聞記者』

日時：令和2年9月27日(日)

①午前10時30分 / ②午後2時

会場：3階 多目的ホール

前売り券の購入について、ただいま図書館カウンターでの販売は停止しております。カウンター及び電話での予約受付のみの取り扱い(前売り券の代金は開催日当日に、受付にてお支払いいただきます)となります。ご了承ください。

入場料：大学生・一般 前売1,000円(当日1,300円)
小・中・高 当日のみ1,000円
シニア(60歳以上)当日のみ1,000円

上映作品：『新聞記者』(2019年・日本・113分)
原案＝望月衣塑子『新聞記者』(角川新書刊)

出演＝シム・ウンギョン 松坂桃李 他
監督＝藤井道人

主催：創世ホール名画鑑賞会実行委員会
(☎088-698-1100)

■東都新聞の若手記者・吉岡(シム・ウンギョン)の元に届いた一通のFAX。そこには大学新設計画の極秘情報が匿名で告発されていた。■吉岡が独自取材を開始する一方で、「国民に尽くす」という使命感に燃える内閣情報調査室の官僚・杉原(松坂桃李)に、現政権に不都合なニュースをコントロールせよと命が下る。■真相究明にもがく新聞記者と、使命と任務の間で葛藤するエリート官僚。二人の正義が対峙するとき、衝撃の事実が明らかになる。■原案は望月衣塑子氏が自身の記者としての歩みを綴った『新聞記者』■第43回日本アカデミー賞に輝いた社会派エンタテインメント！権力とメディアの裏側を描いた話題作です。多数、ご参集下さい。

北島トラディショナル・ナイト vol. 24 ケルト・北欧音楽への旅 5分間の魔法

日時：令和2年10月17日(土)

午後7時開演(午後9時終演予定)

会場：3階 多目的ホール

出演：hatao&nami(ハタオ&ナミ)

畑山智明 アイリッシュフルート、パイプ、
ティンホイッスル ほか
上原奈未 ハープ、ピアノ、ほか



hatao&nami

左から 畑山智明 上原奈未 (敬称略)

主催：北島トラディショナル・ナイト実行委員会
(☎088-698-1100)

前売り券の購入について、ただいま図書館カウンターでの販売は停止しております。カウンター及び電話での予約受付のみの取り扱い(前売り券の代金は開催日当日に、受付にてお支払いいただきます)となります。ご了承ください。

入場料：大学生・一般 前売2,000円(当日2,500円)
小・中・高 前売1,500円(当日2,000円)

■毎年ご好評いただいております「北島トラディショナル・ナイト」、今年は北欧音楽の伝統的な笛奏者・hataoこと畑山智明氏と、ハープ、ピアノ奏者・namiこと上原奈未氏のデュオユニット・hatao & namiが登場！■2011年から活動し、これまでにアルバムを4枚発表、ノルウェー、フランスなど、海外での演奏歴を積み重ねた本格派デュオとして知られています。■ティンホイッスルやアイリッシュフルートなどケルト音楽に欠かせない定番楽器から、北欧の地方に伝わる珍しい笛やスコットランドの伝統楽器・バグパイプなどユニークな楽器を駆使して、彩り豊かに奏でます■あふれる異国情緒、けれどどこか懐かしい…アイルランド～ケルト文化園の伝承曲の魅力をたっぷり堪能できるひとときをお楽しみください！

※創世ホールに来場される方へ※

▼入場される方には、マスクの着用と手指のアルコール消毒をお願いいたします。

▼観客同士の距離を一定の間に保つため、3階多目的ホールの座席数を減らしております。(前後左右を1席空けてお座りいただくようにしております)

■なお、今後の感染症拡大状況に応じて、対応を変更することがあります。ご迷惑をおかけしまして恐れ入りますが、ご協力くださいますようお願い申し上げます。

文化ジャーナル 300号達成記念★第11号復刻掲載

文化ジャーナル

文字とデザインをめぐって②

■今年9月私は初めて鳴門のドイツ館を訪れ、そこに展示されているドイツ人捕虜の手による精緻な印刷物に感銘を受け、古い活字や印刷物に関心を持つ研究者や知人に資料を送った。その反響は大きなものがあり、さっそく10月21日、タイポグラフィや印刷史研究の世界で著名な研究者・片塩二朗氏(朗文堂代表)が東京から2人のデザイナーと共に徳島にきた。その夜、私は彼らに合流、文字やデザインをめぐると真剣な討議に接したのだった。(以上前号までのあらすじ)

■後日、板東孝明氏に、片塩さんとデザイナーの人たちが改行1字下げ(インデント)の問題1つでも真剣に考えているので、感銘を受けたということをお伝えしたら、「ああいう議論はきわめて局地的な傾向です」といわれた。つまり、朗文堂周辺でこそ日常的に議論されているが、多くの人々は無頓着であるらしい。

■片塩氏は、文字やデザインについて深い考察を著作で展開している人として、京都在住の書道家・石川九楊(いしかわきゅうよう)氏を高く評価していた。翌日、さっそく書店で石川氏の著作を2冊買って読んだが、刺激的だった。石川氏は印刷文字の書体論を展開する中から、現代風俗や社会批評にまで切り込む姿勢をみせていた。

■いうまでもなく文字に関わる仕事をしている人は、編集者や印刷関係者、デザイナーに限らない。書道家、看板制作に関わる人、印鑑製作者、数多くの職種があり、各分野でそれぞれ深い思索をめぐらせている人が存在するのだと思う。そしてそれらの人たちは自分の仕事や活動を深化させる途上においてどこかで交差し、出会うことになるのだと思う。

■その夜の議論は多岐にわたった。日本タイポグラフィ協会会員の高齢化問題や、組版ルールをどう定めるかという問題、漫画のふきだし(ネーム)の書体で漢字がゴシック体、ひらがなとカタカナが明朝体になっていること、文中に単行本、雑誌、新聞などの書名や誌紙名が混在するとき、カギカッコ(『』)をどう使い分けるか(使用区分を明解にするには書誌学も知っておく必要がある)、横組みの場合の漢数字とアラビア数字の使い方をどうするか(特に1人、2人、1つ、2つの場合)などなど。

■組版ルールのところでは、単行本の装丁と本文組版をまかされたとして、「……である。」の末尾部分「る。」だけがその章の最終ページにきた場合どう処理するか、という提起がなされた。それは見た目にも美しくないから、前のページで文字を詰めて「る。」がはみ出さないようにするという意見が出たが、もし著者の意向が「文字を詰めたりせずにやってくれ」ということであればどうすべきか、とい

うことで議論になった。この場合には、デザイナーの矜持の問題と同時に、仕事の発注者と受注者の関係という問題もある。

■この夜は、深夜2時頃板東氏のデザイン事務所に場所を移し、それからもひたすらまじめな議論に費した。ふと気がつくと4時30分になっており、やっとお開きになった。なんとタフな人たちなんだろうと思った。片塩さんたちはこの後数時間仮眠をとって、丸亀市の美術館などを回り、夕方高松空港から東京に帰ったのだそう。大変勉強になった一夜だった。たぶん生涯忘れることはないだろう。

■当「通信」前号を、印刷史研究会にお送りしたところ、同会事務局の小宮山博史さんから、丁寧なお手紙を頂戴しました。以下、小宮山さんの承諾を得て、掲載させていただきます。

「創世ホール通信」拜受いたしました。ありがとうございます。また、『印刷史研究』をとりあげていただき感謝いたしております。小さな無名に近い同人が作っておりますので、どこまで浸透するかわかりませんが、できるだけのことはやってゆきたいと考えております。今後とも、なにぞご批評を賜わりたくお願い申し上げます。日本の近代印刷史、特に書体史はまだまだ調べる余地のある分野です。印刷用の書体によって、わたくしたちは技術・思想そして精神を過去から受けつぎ、そして次世代へ伝えていくことを忘れていたのではないかと考えています。読めればいい、わかればいいというのは誠に不遜な言い方だと思うのですが、そういう認識でしか書体を見ていない人々も多いようです。そして、それらの書体には、ヨーロッパ・アメリカの技術が不可欠であったわけで、書体史を考える上で「世界の中での日本」という視点を、残念ながら先人研究者は落していたように思います。そのため誠に不可思議な説が定説として流通していること、その罪は大きいと思っています。書体は人のためにあります。よりよい書体を提供するように、書体を扱うわたくしたちは発言すべきだろうと思います。

徳島県鳴門市のドイツ館に大量の印刷物があることを、貴通信で知りました。機会があれば訪ねたく存じます。

四国の宇和町(愛媛県ですが)に保存されている昭和及び大正建築の小学校の一教室に、毎日新聞社の活版機械が保存展示されています。正確には展示準備中ですが、毎日新聞社が活字を使って新聞を組んでいたそれらの機械は、1989年12月に役目を終えましたが、その一部が日本タイポグラフィ協会を通して、宇和町に寄贈されたのが今年6月です。宇和町や宇和島市のある愛媛県南予地方は、ご存じのとおり、井関盛良(いせき もりたけ)、末広鉄腸(すえひろ てつちよう)をはじめとして多くの新聞人・ジャーナリスト・文人を出していますので、それらとの関係で展示が計画されたら良いなと思っております。

長くなりました。今後とも「印刷史研究会」へご支援をいただきたく、お願い申し上げます。

1995年11月9日 印刷史研究会・小宮山博史

■前号で、図版紹介した『季刊 印刷史研究』の入手方法等について、問い合わせがありました。同誌は、発行部数300部。郵便振替で年間購読料3,000円を印刷史研究会(口座00220-8-45940)宛て送金すれば入手できます。通信欄に「印刷史研究」定期購読希望」と明記すること。なお、『本の雑誌』95年12月号に同会の紹介が2ページ掲載されています。《印刷史研究会 〒221 横浜市神奈川区幸ヶ谷16-6 佐藤タイポグラフィ研究所内 045-441-8191》

タブラトゥーラ 関連情報

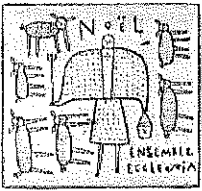
■タブラトゥーラのベストアルバムが9月25日発売された。タイトルは「タブラトゥーラ・コレクション」(キティレコード KTCR-1341)。既発の4枚のアルバムから厳選された、17曲入りの名曲集である。

■毎年クリスマス時期が近づくと、つのださんたちタブラトゥーラのメンバーを中心とするユニットアンサンブル・エクレジアが、中世のころの聖歌を奏で大活躍している。アンサンブル・エクレジアは、すでに3枚のCDを発表しているが、95年10月末、通算4枚目の新作「ノエル 中世フランスのクリスマス」(女子パウロ会 FPD-040)が発表された。3,000円。問い合わせはパルドン・レコードへ。

■そのアンサンブル・エクレジアのツアーが、11月から12月にかけて行なわれ11月29日、香川県高松市にやって来た。場所は高松市・番町教会。筆者は、そのコンサートに徳島ギター協会会長の川竹道夫氏と出かけた。会場には、徳島からリコーダー奏者の庄野龍夫さんと孝子さんご夫妻(那賀川町)、ガラスアートの辻正昭さん(羽ノ浦町)がきていた。3人とも2月に北島で行なったタブラトゥーラ・コンサートにきてくれていた人たちだ。アンサンブル・エクレジアの演奏はすばらしかった。荘厳で華麗、そして清楚な中世の聖歌の数々だった。演奏会の後、我々徳島勢は、全員つのださんに打ち上げ会へ誘われた。地元、高松古楽コンソートの森川通子さんの先導で打ち上げ会場に案内され、楽しいひとときを過ごした。

■タブラトゥーラの5枚目のアルバムは、96年2月に自主レーベルから発表される予定。これまでステージで演奏してきて、アルバム未収録だった「ワルプルギスの夜」などが収められるらしい。レーベル名はタブ・レーベルだそうです。住所・電話番号など連絡先はパルドンと同じです。(パルドン・レコード 〒350-13 埼玉県狭山市入間川 2-23-5-105 0429-55-6652)

後記 ●今年最後の「創世ホール通信」をお届けします。板東孝明さんに、印刷史研究会の小宮山さんからお手紙をいただいたので、「通信」に掲載するんですよとお伝えしたら、「それはすごい。小宮山さんは写植文字を作っている人ですよ」。小宮山さん、どうもありがとうございました。(95・12・06 小西昌幸)



■6月号、7月号に続き「文化ジャーナル」を復刻掲載します。今回は第11号(一九九五年十二月号)です。「文字とデザインをめぐって②」と古楽バンド・タブラトゥーラの情報を掲載しています。書体デザイナーで活字書体史研究の第一人者・小宮山博史さんの書簡も掲載しています。その二十数年後、昨年小宮山博史さんの講演会「だれが明朝体をつくったのか」が創世ホールで実現したわけです。継続することの大切さに気付かされます(小西昌幸)

1995年12月号